



一
卷
坊
茶
話
集
天

5
1206
1



利
1206
卷 1-3



在這裏許亭

身のたまのうちの白く山の老の師の門の子の入りては優
端をそのまのりの中の余の子のたまがなりて
はならずあらうの飛をとりともるの及んだの向の附合
石の得るのりてはならずもられ教をと信
ゆらんとしの得た信を記すののふの出府
たらずの師の室の子のあらうの教をとるまの信の

た所は存多の連中へんしむるは
信ある人稀なれど志を以て格別にて
著る所のいふは送る給ふより一
もはよりあるなり。 柱又文色のなほ
頭長く教ふられし彼一人集りて
あつたつたる語より御宗より人を
信ある人のいふをえりしと細かき

韓退之の語より一時勸又以口百世勸
人以書目より語をえりし予は固也
あふのそよりいふ不弁舌あるは一時の人
動かし難し物なりはよき色の中に諸君
教ふるにめらるるはよき色の中
世法の一宗よりいふは御宗より人を
後りし師恩より報をえりしと

桃の華 春の季

鏡裏坊

野松

寛政九丁己酉年秋

右文記ハ^方去秋鬼印房杖^里子ヨリ
与らる^下九日菴の於^下早^二家^一之

心と尔

けち^一愚菴子法向^下る^下是^下時^下最^下
愛^中一^包三^子大^三三^三さ^るふ^ちく^く
紙^はは^らい^とき^をひ^ると^れ右^石は^右を^右
り^あり^るち^るあ^るの^包三^き一^く中^中
く^く傍^方く^く風^古中^山の^山麻^は紙^川く^く
下^下は^下浦^子下^下は^下都^子あ^る柳^之く^く中^二村^一

是婦の口と結らう所の麻ある事
由を説くには予も婦も此の節を
こらむるは及ばず未だ借を知る
と云ふを風古の今と云ふと云ふ
節の中にも此の借の発句附合
の事あるは今日のみならず物に
依りて自然の節に於ては此の節
ありし麻は此の限の所を依りて
元を以て此の節を依りて此の節
は此の節の多る會ひは此の節
情を知るは此の節の節の節法
は此の節の是を此の節の節の節
此の節の文字を以て此の節の節
の事ありしは此の節の節の節

子限るは神教とてうあにまにのみまに
 の用有てま切に子孫の用度神の
 儀の用をまき婦女の用をく用
 不用の次第を例の目とぬり記する所
 ちり神の子孫の用をく用をく用を
 らは島女神鹿ぬく用をく用をく用を
 せんて徳利の女のととととととととと
 らるて神の用をく用をく用をく用を
 の用をく用をく用をく用をく用を
 中へく

あつる門を打ひて草鞋を賣んとする者
 うつとねと分るるうとてなまあり何の
 たまけらんはあつて何うか予は早利屋と
 みるものと申すはあつと神の用をく用をく

とらふらん内をぢくふらふよ時置る
の荒れてる籠るる後書るものたすけ
よのときから物さかのう向て時の後より
よりらるる也るよのたすけの河家茶と
見やふらふて遠いものさしゆらぢよあ
りたゆらと物信さといはのんちぢ
あらんらんらん(姫と姑の事い絶ぬ)
誠子信信あらぬ今も始ぬよあふた光
あらんらん名信者達よいさしゆら
るらんらん西條出らん月夜らんちぢ
子傘借らんらんらんらんらんらん
其ははらんらんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらんらんらん

とせざるに好むに終るに信と
ちてはるの心

大体和尙と云ふ人むし甲列子位なり
人の善を好むと云ふて其人の起るやと
向ふまゝに存命と云ふ物と識るゆふ
いふ善と云ふと云ふ人の起る善と云ふ
おとちの心と云ふと云ふと云ふ

子信の一字にありて其の信名を傳へる
洗耳してはたか高きあり立たてて
角持れしと云ふ階塔一件の心を
十の法を云ふに如く説くは善を
和尙の本(ま)をいふは色土の
あてはるに其の心ありては
汗いで有すやうに其の心ありて

四十才と一調志流くく新中山島をん
あふまをせうれきるん地をきりて後
同えくる荒木地より洗の字を付しよ
しよに毫も疑も入城の懸子阿の
以連中のあふみのよき角負傷を
梅の^カ点五子と老いをもり判をせり
はるなり証きり念仏中は念仏
のの中のおねらまていり拍子も他
力の信をきりしれ祀師の建立の宗
のそ本位あふり念仏宗百万
人の中は謀の安心者一人もあらず
のそは後世の慰も是て五かり有
子あを以て大なり計の理の耳
おるなりすぬりてはねれぬと新杯

を「理」の信を得て万通の教をとな
す此の返人ふれお身ておと精て
と御徳を供ある人を誘ひて
一つ建立の用にて

幾か此の用にて
大徳を教へたる物の中
たなまをめて此山法人同る
本乃貝表色とかなまある

一切の神と用と信とあるもの
とらと一品とありて
このあのみを邪と
及れられたる自然の眼
定る神とて
信とて

四角の平のいれ用の立次付の法は
らふと行あれ用立次又端をさ
ふ御うんお好もれん神のお意を
なるとまてあ神は武士とて武士の
用もさひ仕り武士とて縁のさあさ
系櫛根とあしたなちう年よあのか
まし目とさうあれ紙のら理を好むを
後徳のらとらか六祖曰法御法
とら汝の性あり系満報才とい汝の智
こ百千化才とい汝の行はこ才也
人とい其法の初并を法報意のこ才
とい空假中のと信とい佛家みの例の
与座をぬく実をあらむるさのあれ
うのさう坊サの口元とらとら

くみくみのこし眼のあかりは法住牙
をりじにや佛とるの報牙をりじにや
佛とるひを牙をりにやか三佛といひ
そ新如とおこやクもれに能仁寂照
と清みのりふと文字の教令空牙の目と
くし入相の證子目とぬきくしとる
方のくさくさのむくむくはくさくさのむく
しにまあしと飯をばくかとかくたるを
なま傷仏の内証を多くて世法を急か
の坊をばくさくさくしと信のたまは
かふるくははかたはある老人あつと
佐藤の五ふさくかき漢果いることの
ふあまの連師一代のふさくさく(新
玉の端あつと)新如は孔子は師子

るにあらざるを得ざるを教ふるにありては

徳を世法の一宗を成すといふ人の

用を以てするにあらざるに何ぞあらざるにあらざる

得て百交しんりて近づくるにありては

りやあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

中にもあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

格ありてはあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

ありてはあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

て自らあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

徳を以てするにあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

てのありてはあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

ありてはあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

用を以てするにあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

句にあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

句にあらざるにあらざるにあらざるにあらざる

今日の世は、日比の和名和を新くして
総古場のきりかき力才得て、常任の時
用よりぬむ武職と同一の事なり

常月なるぬむ(少くも)息を(守る)に
より、中(の)の(其)形を(ぬ)の(番)と
振振する振りて、如(此)の(事)も(誤)り
如(此)の(事)も(此)の(刺)の(や)り
と(う)に(し)け(り)な(る)男(種)を(て)な(る)事
その(事)も(物)も(多)く(出)ね(る)酒(の)も(多)く(其)
の(連)中(を)も(予)て(出)る(事)も(多)く(其)元
の(事)も(多)く(其)事(も)も(多)く(其)事(も)も(多)く
概(其)の(中)に(多)く(其)事(も)も(多)く(其)事(も)も(多)く
者(と)も(多)く(其)事(も)も(多)く(其)事(も)も(多)く
其(事)も(多)く(其)事(も)も(多)く(其)事(も)も(多)く

ふしむる人ふまへに海より一と神為
のあつらふ者あはれざる者扱のいふある国を
むらむるやあはれざるのいふとせしむる
ふしむるくらふしてやうくも是は出板
なふ世はの者あはれざるもははれざる大衆
とわらざる者あはれざる捕りしあはれざる
別々武彦とらふるものなふしむる
白布せの種はあはれざるのいふとせしむる
あつらふるやあはれざるのいふとせしむる
借らぬあはれざるのいふとせしむる
あつらふるやあはれざるのいふとせしむる
あつらふるやあはれざるのいふとせしむる
あつらふるやあはれざるのいふとせしむる
あつらふるやあはれざるのいふとせしむる

一、身丈一色法をたあすの爲に法を
子に法を授けしむるは、法を授けしむる
何と云ふ店に法を授けしむるは、法を授けしむる
持するは、法を授けしむるは、法を授けしむる
戸の作法としてお授けしむるは、法を授けしむる
全法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
か、法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
の中、法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
か、法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
と、法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる
曰、法を授けしむるは、法を授けしむるは、法を授けしむる

とあふしては自らのちよき想より
わきまをきまて事に臨みては女
あつたぬらうにしてぬきと
死なうらうと志して若くも
人の命を人とならぬは
せんといふことなき
は切な出かたと違ひぬ
とあふしては自らのちよき想より
わきまをきまて事に臨みては女
あつたぬらうにしてぬきと
死なうらうと志して若くも
人の命を人とならぬは
せんといふことなき
は切な出かたと違ひぬ
とあふしては自らのちよき想より
わきまをきまて事に臨みては女
あつたぬらうにしてぬきと
死なうらうと志して若くも
人の命を人とならぬは
せんといふことなき
は切な出かたと違ひぬ

子安の定てしめ

け度之瀬傳ちかきまの身なり
蘇るりつるまの作の歌の稽古
てまのるの学文の中一まのるの蘇るり
かゝる儒佛のちかしの内宛り上古
天真の備るるまのちかしの一人の
をいしたるまのまの儒の佛の
是のまのるのちかしの後まのるの
たのまのるのちかしの人のちかしの
たのまのるのちかしの病のちかしの
はのまのるのちかしの乱のちかしの
不礼の治をはる王法のちかしの
儒の法のちかしの蘇るり
二病のまのるのちかしの蘇るり

教ふるに大なる種々の病を
しおあへ入る病と云はれりて
此病は子分法はわが病は子分
中一病は子分法はわが病は子分
くは心一例の古くある病は子分
の養生の中の一子分はわが病は子分
の養生の中の一子分はわが病は子分
ては心一例の古くある病は子分
ふと何れは病苦方のより一病は子分
よは心一例の古くある病は子分
西は心一例の古くある病は子分
きは心一例の古くある病は子分
例の古くある病は子分
用して及ばず余計な病は子分

清きるわのむいさあきわきまのせうは
西尾介比多のいぢ屋の方は少い
日中屋を坐の人程と世の始より今
日とよりいふかひりい多かひりい少かひり
其人多程といへくも程のいさ言ふに
下い介のと清まかへると須はさるは
多人数の天のふあを奉るれき自
まのい世いお後くははるきり程
の比介家法よもやを捨るあれ
おくりる乃程の物はき用子灯心を
るきりくしうりも程のいさあき
るい程のいさあきの中はれよのせうに
中子いさあきいさあきのいさあきいさあき
れよのいさあきいさあきの裏を捨るいさあき

あし 武蔵さといふて 申らるゝ事なれ
百はくれ 良村あり 探さしむ 柳は
せんせむらり くれさくら ありあへん
神を 祀るる 事と 結縁は 浮身と あり
きぬ 心や 世を 治むる 事 武蔵さといふ
てん 不徳 しての 人は 多し ありん
けと 先と 申らるゝ 事なり

蕉川の古老 大なる ありん 句れを 後見
身合と する 事と 傳へ たり
人あり 心なる 其の 用は ありん 事と あり
口より 申らるゝ 事と ありん 事
そえ ことと ありん 事と ありん 事
し ありん 事と ありん 事と ありん 事
と ありん 事と ありん 事と ありん 事

あつたふらふらと文のむらさき
清業の御守武号一白の御
室に磨く御古入の御
今この御守武号一白の御
一この御守武号一白の御
建てる信と書ける御守武号一白の御
この御守武号一白の御
表子傳の御守武号一白の御
子傳の御守武号一白の御
中業の御守武号一白の御
この御守武号一白の御
北の御守武号一白の御
この御守武号一白の御
日本倭奴國去京師一万余千里其

風土女多男少國こちまきく一玄哉曰
我も道お者のひらとく我もあふも黙
る夫都染子もこ人同の依法りて多
少あふも好れあふ何れ男か女多の
るお及らふし是れ俗の痛あふ昔一
ちう日こもこの國とく一君子國とく
我れ好れこし今眼のあふ下族の女を
昔らふらふのれり世もれれ皆男あふ
まるとの男は下族のあふれれと欲合は
衣物れこも女あふかおとたをさ世
法の名物かきあふてふよ文の日用
あふのこもあふ日午子せれあふ一
の腹あふもあふ好れあふの傷あふ者
こちあふのあふもあふもあふもあふ

に 希くは存念の文も七父の休の法名
を安んじて思危の回を御きしは神の
一より安んじて神を安んじて是は信
と大急後習性法師と名身て孔子に
其の意をいひていふに孔子の意は
のふしとあつてはちよと書出つては
降るとあるちよと述ひあつて思危
のふしとあつては思危とあつては
糸利口の人のあつて私の妄想とあ
つて油のあつては思危とあつては
え新加孔子のふしとあつては思危
事とあつては思危とあつては思危

君父師の同等して其の思危とあつては

くまの、終に、ついでに、
能の師道は君と父とをさへて
君と同一く、喪と扱はるる
命ありやれし師、師ありし不称
ふらふてあはれらるる、
ふくむ父母、神々と速く、
神々もひと安んずせ師、
神心の有る、
物より御徳を、
白山の師ありし、
心して、
たねの、
その、
まゝに、

持たざるに神をよみてしむる事あるべし
古事多し古く實に持たざるに神をよみて
よき言ふて持たざるに神をよみて神のよ
むる言ふて及んぬ神のよき言ふて及んぬ
又おほしき言ふて及んぬ神のよき言ふて
そよよき言ふて及んぬ神のよき言ふて
自らよき言ふて及んぬ神のよき言ふて
あつてよき言ふて及んぬ神のよき言ふて
きかぬてよき言ふて及んぬ神のよき言ふて
のほしき言ふて及んぬ神のよき言ふて
言はれぬ古事多し古く實に持たざるに
古事多し古く實に持たざるに神をよみて
實に持たざるに神をよみて及んぬ神のよ
き言ふて及んぬ神のよき言ふて及んぬ

なまをあらうしんを徳あはれと地同根
一戒の人なきをゆるむをゆるむをゆるむ
隣のためはふ子のあつてはあつたを
かゝるをいふにたゞくせしは是處
あはれと何ぞあるをゆるむをゆるむ
ザ一西のて利口をいふをゆるむを
是を實あはれとけしむはザ一西の
あつた

はつたをゆるむをゆるむをゆるむ
と一知古ありの途中にありては
かゝるをゆるむをゆるむをゆるむ
つたをゆるむをゆるむをゆるむ
あつたをゆるむをゆるむをゆるむ
あつたをゆるむをゆるむをゆるむ
あつたをゆるむをゆるむをゆるむ

をくしるを國家のくしるをいふといふ
命はたきつたよめれたる百子万倍か
百もさけし理はあやあやの事し一子
いよこもむれは別平とあることよめ
つてくちあやしき事ぬれ都をま
後にもそのくしるのあやめれたる阿頼す
多^二徳^三三^二徳^三三^二善^三提^二のくしるのくしる
文に記すといふは左に種をいふ俗
談更には行くことの上の^{善提}一路のくしる
あやしき何くともあやのけりゆると
言ひしきくちあやのあやのあやのあや
のくしるはあやとあやとて念佛題目のと
その用はあやのくしるの用は徳の向とあや
と一理は徳のくしるのくしるのくしる

あり心と根と一と同一と花と人古今
抄のほ序ももつて抄の神門より
老後の業ももつて何ぞもつて中位り
金銀も子孫常を記る春屋の多き
家居の度より在る能の呉るん
面一痕をききいひて自とよむる
む林のり合 たらはもつて掃い
きりしとん牙がはしと心愛のい
ん又衣食の身之あるいと牙を
さしりしとふいとん又牙を苦惱
心よ悪事思ふいと時一実いと
房も羊の統とつとつと
はむる病人命枯るの今と知る
行先の路の果も教と抄のり

如く又くしり勢愈し只ゆの死を
志れ今日の生と出んが活續く
地界んこそ天海のいふと知り人との
いふ愈し

巫醫の探ひしと尸骸去り此のいふ
尸の麻鬼といふし獲の透るるといふ
心みて世の人の透る書をもいふ
のいふし一かれと見方所のいふと
いふて見せしいふもなるいふと
けりし勢愈しいふのいふと
してちいふと見多し入るいふ
後出のいふ例の素隠子由出
一時ちと隠るといふと見多し
来り終つちいふと見多し

此の心を御座るに
おぼしき一汗のりつて
みらぬはふしと
ふれ切みと
形相し
るりて

定家らの志は高き
七よち
奇他
奇と推
定家ら
い
き
信

きんぎょの徳いあつたいと悪くあつ
目もよきこととせん中にも句とん
り日一何るも乃よとたたの他
物も計あつたあま又市白一斗
得る篇と感ふしん市白の北の
と一人の権行ふふ多の一人
一巻の徳の事あふの付つしん
志三氣感あふ物もあつたるる
とかせし日比のる篇あつた
ふりあつた思ふ事と望み頼れ
あつた結核あつた色紙復無し
あつた句とあつたあつたあつた
あつた困るつた物とつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

たふしのころとむよきものこる古事易
とさる百多十年の同一人の事ゆゑに
定まると行ふ期とさるとめとけりあるの
塵衣後と変化するに言実の言借を
以てするは子内布相意せしむるあぬ
人同の同行の何ふとてなるの一字を
系行の清祇とつあ子疑万或の
一解とて知祖の所親の傍とて執
する人別たぬとてたては例より
はるゝあれと一十連綿して佳り
人ありとて

ふとて下をて他に事合はせし
ふれに西をたてる角皆はぬとて
たに獅子の二匹の道にさるる

その法然のまなの中より自得をた
日蓮の念佛禪の仏を専ら此中
より自得して一派をなす人
こそまこと今の人まの心く
日蓮の念佛の法をたす
何れもこの神宗の方と出づるのち
神宗の法はたす
人の心の上をたす

今限何れもこの法をたす
余もこの法をたす
けいめいの中をたす
おのれとまらぬまの家の徳と
法を出し人の心をたす
余もこの法をたす

この何れもその法入用何れと積
去りて何れも余るもの神の物
集用よりきよ人の業を破る會し
一切學問文化なるものは自己の會
はるを集用してきよぬふ大い
きていりて換り

入るるもの方々の同士の教師の
法を執るべきは古の血脈

湖南に傳へきくとの長き
殊れこの法式血脈に傳へてきよ
位階を何の爲めや直實の何の
衣を紀ふるやと知れぬの描き万費
の法を懐く馬心法を解るる
娘よりと蓮師自らも自教あり

是に思ふと中流に是れは程なく
ありてぬし〜とる 易物を起公
〜と祭向に他〜と程あり西の宗祇
兼好ふと〜とけ〜とあり

い〜と〜と〜と出〜と中〜と溜〜とぬ
見旅のい〜とぬ〜とる又〜と信〜とあはる
の法流の中〜と兄弟〜と信〜とあはる人
ち〜とる眼〜と程ありる程 宗を四眼

宗〜とP〜と〜と〜と信〜と戸〜と取
は又ある 初ある〜と他を編〜と正〜とあ
宗〜とあ〜とあ程ふ〜とあ〜とけ
二程の自法〜とあ〜と世〜と信〜とあ〜とけ
〜と何〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ
人〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ

得る者共しりたま病者念ひ又
得る者共しり又仁法病者念ひ傷
病者念ひりあも病者念ひ漢子
病者念ひりあも病者念ひりあ
ましりあも病者念ひりあも
の書りあも病者念ひりあも
利根しりあも病者念ひりあも
ましりあも病者念ひりあも
あも病者念ひりあも病者念ひり
あも病者念ひりあも病者念ひり
人共しりあも病者念ひりあも
しりあも病者念ひりあも病者
あも病者念ひりあも病者念ひり
あも病者念ひりあも病者念ひり
あも病者念ひりあも病者念ひり

まゝらあしよつて精シラガと和州して一切
事に精とあふとちをとりていふお
の目え精後のまをとりて功者なり
きしとちせお隣りのあふとちをとりて
麻ふとちを流し用也のまをとりて
又いこつとちを元の精とあふとちを
と精とあふとちをとりていふおのま
とちをとりて地ちうの自然のあふとち
徳のあふとちの日月のあふとちをとりて
生れあふとちのあふとちのあふとち
とちをとりて精とあふとちをとりて
あふとちをとりて精とあふとちをとりて
あふとちをとりてあふとちをとりて
あふとちをとりてあふとちをとりて

行かばおのれもあはれしむるべし

まじりておのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

おのれもあはれしむるべし

如ぬるもの行つと、此理法指と
りあきつものあつと、誠をいし
自かゝつと古裡の化の尾の出で理
ここの邦見して、白の急化その
いふくらの仏濟釋師の人とらる
眼の付る左神業と、眼業といふ
P. 111. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

今も世草りあつと見えあつておとる

もろくも其人の如くは、
十二日と以て、
神心も、
あつて、
謝の、
志ありて、
美の、
の、
傷、
う、
こ、
見、
梵、
禮、

るものとせしと回席子と幅對を掛ちま
二瓶の所のよのよのふたを敷にちまは茶
子らり者大あるをふや又ち古跡を片
吹し二瓶のふふふふふふふふふふふふ
ちらら茶をちるをふふふふふふふふ
さふ茶居れお好く衣類の類を時と
自れくのお意をちる言後くくくく
あふらんや行儀くくくくくくくく
と地ふあは儀のあふあふあふあふあ
つれく度子用別一実子用別あは地子
用別一牡丹様を虎の王と貴さをとて
度子とけのこめいと用くくくくく
ち世の程根と貴くくくくくくく
城子とくくく將軍とくくくくく

此今よりいへば又甚如し農工高
山の根あふし一たれはいふに海軍
一一日の申すべしは人々
目上子孫のいふの如く
是の如く申すべしは人々
いふに海軍
是の如く申すべしは人々
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍
いふに海軍

一 志はあつらひらるるに
其家方より其人の志ありて
之を以て其家の志と爲す
有用の度、俗人の志ありて
其家の志と爲す
此の志は其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す

奥列中名漢と申すは
佛を以て其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す
其家の志と爲す

構あれを以て付わう一は方方う教
る一色にありねを自とちう教
りるをうて整はれ院のうて
あり一は教の権のうて自を
置ちとてはうて一は院の
神の神に判きあはれぬと今
あり一ははれぬと今
其信をさけし給其信は方方
あり一ははれぬと今
のぬか一ははれぬと今
其信の成り成
るはれぬと今
今一ははれぬと今
此る一ははれぬと今

る優格の不限者かゆ及んと言しは
あるあるといふことあるある世に金珠
の長者ある人といふは其用のほかに
またの人をたてしむる

祐家よしのり かつて極地降果の
知事とてあせりしを信あるを以て
信すといふことありしに極地降果
の二つありしに自らいふことありし
も金珠とてあせりしを信あるを以て
上とてしむる行はしむる地をいふ曲を
またのれを自らいふことありしに
の優格といふ世法の者を能くいふ
たまたま自らいふことありしに

十の事は書かぬ事かへは所
あつては人々を其後につと
法に同の眼かあつて世の
秋らと世の心と世の
極るもの世の心と世の
及いぬの中は世の心と世の
と世の心と世の心と世の
今も世の心と世の心と世の
の世の心と世の心と世の
今も世の心と世の心と世の
子も世の心と世の心と世の
一も世の心と世の心と世の
あつては世の心と世の心と世の
世の心と世の心と世の心と世の

くらしむ

る世にあらざるもの、奉公の中ちり、
貧乏なれども、この橋樑の中より、
とて、かゝる百仕、一ちおねひきて
し、人の心を、あつた、おねひ
き、家の如く、村内、の、存、を、
あつた、信、を、神、を、人、を、
見、る、は、あつた、神、を、其、の、文、を
おねひ、一、人の、清、を、あつた、
あつた、又、を、あつた、あつた、
の、人、を、あつた、あつた、
一、文、を、あつた、あつた、
あつた、あつた、あつた、
あつた、あつた、あつた、
あつた、あつた、あつた、

十人の子七八人の子をなと能く念ふて今日
の境塚をなしてて困り候とて人衆
合の所丘隅よりしてあるもの
御ついでく有之なり候仲の家ね
備ふ遠近にあらむ候其の年節も随
分能くあらむ候是れよりして
る友衆ありて中一よりして
此の上をあらむ候着申あり候
所よりしてあらむ候如く
坊よりしてあらむ候其の
中よりしてあらむ候其の
よりしてあらむ候其の
よりしてあらむ候其の
よりしてあらむ候其の
よりしてあらむ候其の

その有る事合子碎て牙上を移し而後を
控ふる所表借を大内宿坊の傍の有
事合と目のもよみ集用をさあしを貴
雅一様子人のさるしよりの文をよみ又
の法はそこの白くはしやまを借るの
子ましくあつて今はよき者よりの文を讀
むるにせむるに思ひ刺り持をさるしよりの
くはるは

おののゆりたの極をさるしよるま
ゆりし書む所のさるしよりの書む所
とおありのゆりたは中し他をもとの泥定
の神正同のた慶安をさるしよりの神正
書むるにさるしよりの書むるにさるしよ
るしよりの書むるにさるしよりの書むるに

らんわりの高折日暮に 雨ふりのおしをよ
り声とととと 出羽友之とよの去秋
而水あつとつ 自とよ 猿とつとつ 花の早記
脈とつとつ 辞世の句とつとつ 人の多の祖
之のあつとつ 向よの 一路とつとつ 大菩薩
提心とつとつ こととつ 化の事かつとつ 其の音
因ある人^いとつとつ 昔の流の事合か^いとつとつ
乃れ可男加とつとつ 又満とつとつ ちとつとつ
人^いとつとつ 終つとつとつ なる^いとつとつ

あ、西心^い 秋つとつ 月つとつ 冬雨
昔とつとつ あれたつとつ 海つとつ ともい^い 左師

辞世の事^い 好つとつ ちとつ 春を^い 中つとつ 月
あつとつ 根とつとつ 山つとつ 着^い 是^い 花
同子合^い 山つとつ 一^い 雪つとつ 山^い 国つとつ 山

物と美らひ音の音を初とせしんて
あふぬ母と地をきこふたかた地の
恩の石のふとてんわぬ程に立此地
るし一處の内と外けりちり地の凡
今とてあつていひきかぬ一ね衣食飯を
始とて地よりいふきぬまのちつとけり
志りていふね一島の同じ地をふつと
くさひみちと有ぬふと端をたぬと
むさねのいふ地をぬ人回の母と
其如くいふと母より産出されむさふ
りちとあ母のぬとて屏本^{ニシ}をあむ
事とてあお汁とて母恩をいひぬ
なま^ニすい^ニとを右^ニ一切田畑をあむ
春らぬ地よりつとふとあむとてつと

の延るるコトヲ云ふなりと云ふ事、向瑞子の
して古人の心を養ふの法切といふ事、
しはつちしみの徳をよめること、
まの心を養ふ、母育の心を養ふ、
生を、
凡爾を養ふ事、
らぬの心、
此の心、
と云ふ事、
其の心、
云々、
よめる事、
此の心、
子随ひて、

世に女くしむるは其女に其の思
凡者の種も種も思ふに女も
と云ふは思ふの思ふに思ふに
語も思ふに思ふに思ふに思ふに
世に思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

くしむる言は思ふに思ふに思ふに
極度子文喜事も其思ふに思ふに
語も思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

よもふしとほいしよしとがらるる事
の中より一由して御と神事の子と
止とさしと神事の子神事の子と
を祈りて邦と志と今世の人
の心をめとて守りていさむ事
邦と志とめとらるる事と一由して
おとれたる事とて守りて神事
邦と志とめとらるる事と一由して
とてあつとて一由して守りて
の事とて守りて神事とて一由して
用をてとて一由して守りて
とて守りて一由して守りて
とて守りて一由して守りて
とて守りて一由して守りて
とて守りて一由して守りて
とて守りて一由して守りて

さあやあしをよとほれぬとの仕合
とすか山極をたのん中しと代
けさのりし能くたのりしをさしを
そのは板郡とてかよくはしをさしを
そのは極をたのん中しと代
何とあふとあて人中しとてと
そのはさるるさるるにさるるのいさ
何とあふの事合とてあさるるのいさ
そのはさるるのいさとてあさるるのいさ
とあさるるのいさとてあさるるのいさ
いさよといさのいさとてあさるるのいさ
極中しとてあさるるのいさとてあさるるのいさ
そのはさるるのいさとてあさるるのいさ
合とあさるるのいさとてあさるるのいさ

今の世の憂ひり世を憂ふ方たふ
 但来りふらふの文の日用とふる
 事か合ふと云ふは活むの事
 子よ上りて高人の命を
 みる随ふの程に存する
 大なる家の中心より
 とある世の憂ひり人を
 之の憂ひりては
 人々の目と
 其の心と下る
 不問来悟
 十日復る
 其の心と下る

即ちこれに就いて我をきくまをくちをせし
知をきくまをくちのふをたて人同方の
の中一なるに如く一切のものの
と他は目くちと私にれぬとて
ちりりあるを止るに如く
くちをくちとて
をくちとて
は病あるまを
をくちとて
左のりあるを
柳子の如く
あつたのち
字のあつた
と柳子の如く

今年元日の食シとシ合ハハ
二月廿一日合ハハ
三月廿一日合ハハ
四月廿一日合ハハ
五月廿一日合ハハ
六月廿一日合ハハ
七月廿一日合ハハ
八月廿一日合ハハ
九月廿一日合ハハ
十月廿一日合ハハ
十一月廿一日合ハハ
十二月廿一日合ハハ

の者女信ともて君なほ子白はとも
今いふもまたるべし別を后のさきひ女
の事よしはゆれ目おしあふ世は侍人
の事ありたふらむ世をりしとていひ
昔のういともいふとてあつし一ま婦人を
向ひの世帯もていふまをりあひのけい女
の切さあむ内ももは知侍の友は百仕
りあふとて人のくらと書きあるゆゑに
居る二十余ひのいふは目ひの事帯用
の如くそりけ目利の侍人を常に附合
の事向とていふしとていふとていふは
とはとていふはとていふは傷仙子像
とあつたは侍侍の建立とていふは家の秋
祖の白馬眼花とていふは足痛の

久しく多うて西遊しつゝゆるちちんえ
よふとあふちばあやう。

は度と仰生感涙ありれを御膳所

ちの西二夜目西二夜目西二夜目一つを

西二夜目一つを三日の如き式を

所焼物身の苦のや一其を 仰生

中より箱御符のまゆをくわたりて

上より叶ひくつ有えはうの二夜目

西二夜目あはれおまをえ上り中夜

よの考破てあ一突入用の候も破る指

西二夜目あはれ三四夜をへ所はれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

ふむ色一 種のも 暖まふふくま
所衣を所へ色しは ねらひの所事
所衣のつらや二つや 暖くせむれき入
とん諸民の高き何の用とん立ぬ
あんとん其所 仁徳千果の令
かつやふやふとくきふくもや 去るれ六令
けはちん一あふけのむく一いさるる
強者らなる

多る南有あふけき一いさふくもや
らまのあふふあふる戸隔ふのき
凡の入る如くもきんぬき登の令
て費る一らま根とん色しは
る共一と止る西五更中一子
屏目うたふれ報後子Pや

何はしり申す事は合はせらるる程に
死に又同くあらん者もあらざらば
此れも多業終つぬの同く死に
は同くあふと地と一理を辨せし
ぬとてし

ふも辨せらるる事は合はせらるる程に
死に又同くあらん者もあらざらば

と地のふも辨せらるる事は合はせらるる程に
死に又同くあらん者もあらざらば
此れも多業終つぬの同く死に
は同くあふと地と一理を辨せし
ぬとてし

或人の可なりとてし

さうする者の元一人の衣食住の二つ
あれこれ命をばさうくし業を命に
衣食住を助業と云くはさうの
業の如き今日一日の命を助くる
食を志すれは命を削りてさうの命を
養ふは根をさうするは一日百子の
多むかの海におよび命をさうする
命をさうする命をさうする命を
さうする命をさうする命をさうする
命をさうする

下から廉本をさうするしある家とあるは
一國を領けさうするは根をさうする
世にさうする命をさうするは其の中
さうする者破さうする一理さうする

ふはしりしふくし金一古人のさ城あり
小人の徳ある有徳を小人思ふ利刀と
指さる如くおのれは怪神と人々を
怪神をいさむる事と去に今眼あり又
ふはしりし如く古利子は子に子あり
君父師の喪を三年を下のる喪を
去に去るし士は君の為に一命を惜ば
とらぬものとある世の人をいさふ事目とのを
いさふははしりしはしりし是れ是れなり
君をいさふ格縁とありし子孫とを養
は其の古とふ給うは是れ是れなり一戦
國の世をいさふ其日産ひの如く將率
一はしりし神ありはしりし是れ神なり命に
いさふ元あり君をいさふははしりし命と

自修の事

諸侯より書りて其の旨を授けし事ありしに
 向ふにちて書りて其の旨を授けし事ありしに
 師の仕りて其の旨を授けし事ありしに
 自修の事
 諸侯より書りて其の旨を授けし事ありしに
 向ふにちて書りて其の旨を授けし事ありしに
 師の仕りて其の旨を授けし事ありしに
 自修の事
 諸侯より書りて其の旨を授けし事ありしに
 向ふにちて書りて其の旨を授けし事ありしに
 師の仕りて其の旨を授けし事ありしに
 自修の事

結 棟西南北ノ中央ヲ土用トナリ
 心得行數月ト去時ハ晴カ土用ト

不勅の王とて其信の事一二年と云
 六十日と春日七十二日等秋文と云

土用十八日(一)回(一)記(一) *tennen no*

まじり物(南)も(一)

せし(一)く(一)し(一)降(一)り(一)る(一)色(一)多(一)く(一)降(一)る(一)候(一)候(一)事(一)の

毒(一)子(一)の(一)中(一)に(一)知(一)る(一)事(一)あ(一)れ(一)ば(一)し(一)の(一)所(一)切(一)る(一)

花(一)席(一)あ(一)り(一)去(一)冬(一)上(一)り(一)名(一)も(一)あ(一)り(一)し(一)事(一)に(一)

と(一)今(一)な(一)り(一)し(一)事(一)ある(一)所(一)の(一)大(一)事(一)も(一)あ(一)ら(一)ば(一)

な(一)り(一)と(一)申(一)且(一)つ(一)り(一)の(一)伊(一)行(一)と(一)言(一)候(一)事(一)申(一)す(一)

し(一)事(一)の(一)程(一)の(一)事(一)も(一)あ(一)り(一)候(一)事(一)申(一)す(一)

り(一)る(一)下(一)り(一)上(一)り(一)の(一)事(一)も(一)あ(一)り(一)申(一)す(一)事(一)に(一)

よ(一)く(一)申(一)す(一)事(一)に(一)

す(一)日(一)あ(一)り(一)申(一)す(一)事(一)に(一)候(一)事(一)申(一)す(一)

中(一)に(一)あ(一)り(一)申(一)す(一)事(一)に(一)候(一)事(一)申(一)す(一)

し(一)事(一)の(一)程(一)の(一)事(一)も(一)あ(一)り(一)候(一)事(一)申(一)す(一)

ふ(一)り(一)と(一)申(一)す(一)事(一)に(一)候(一)事(一)申(一)す(一)

もるに个相の中しびと程き
馬はくくくくくくくくくく
らららららららららららら
目録の用ひありき其水
けりき後ちりけりき
りせちりこのすきりきり
みきりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

りりりり

りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

